

増上寺徳川家霊廟の風景（10）

―海を渡った灯籠たち（上）―

今回の徳川家霊廟の風景は清揚院と桂昌院の霊廟について書いてみようと思います。

きっかけとなったのは、一昨年、ミラノ在住の今井めぐみ様から清揚院に献納された前田家の銅灯籠がミラノ市内の盆栽社の日本庭園にあるとのお手紙を頂いたことからでした。清揚院について色々調べているうちに、昨年になって今度はペンシルベニア大学の西村曜子先生から情報を頂き、桂昌院の銅灯籠が同大学の博物館に二基収蔵されていることがわかりました。

清揚院は六代將軍徳川家宣（文昭院）の父親で、徳川綱吉（常憲院）の兄に当たる徳川綱重です。綱吉が將軍になる前に館林を所領としていたことから館林宰相と呼ばれていたのに対して甲府を所領としていたので甲府宰相とも呼ばれていました。綱重は、家綱に先立つ延宝六年九月十四日に亡くなり小石川の伝通院に葬られます。家宣（甲府宰相綱重）が將軍継嗣となった後、宝永二年に將軍生父として増上寺に改葬されます。清揚院の銅灯籠については既にロシアのエルミタージュ美術館に尾張家の灯籠二基が収蔵されていることが知られていますが、ミラノで前田家の銅灯籠が報告されたことで清揚院への灯籠献納の実態が判ってきました。

まず増上寺内の清揚院廟、桂昌院廟の位置を確認してみます。下の絵図は、東京都立中央図書館木子文庫所蔵の増上寺絵図を元に作成したものです。元図には方丈の有った所に「開拓使」と書かれています。増上寺の旧方丈に「開拓使東京出張所」が置かれたのは明治四年のこと。また図の中央に本堂が描かれています。本堂は明治六年十二月に焼失し、建築に取りかかるのが明治十二年の十一月です。従って、この絵図は明治の比較的早い時期に作成された物である事が判ります。明治十七年に陸軍参謀本部測量局が作成した『五千分一東京図測量原図』にも同じ建物配置が描かれています。つまり今に伝えられている幕末・明治期の増上寺写真が撮られた時期の建物配置を示していることとなります。

清揚院、桂昌院ともに明治の早い時期に霊廟の建物が取り払われてしまいます。伊坂道子氏は『芝増上寺境内地の歴史的景観』（2013年 岩田書院）の中で

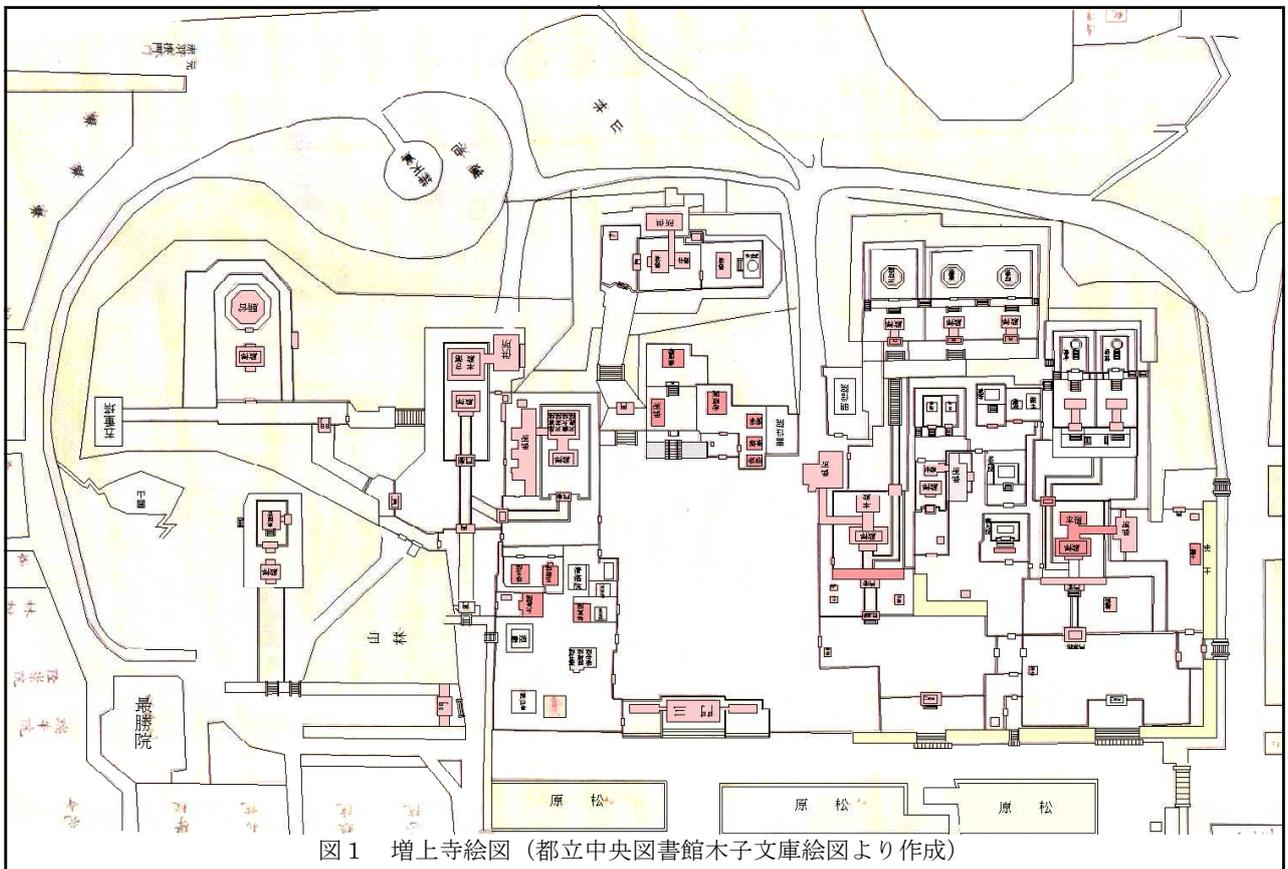


図1 増上寺絵図（都立中央図書館木子文庫絵図より作成）

明治二十三年には徳川家の霊廟整備への決断があった。以前より老朽化のみられていた清揚院霊廟は、別当による哀願書提出の甲斐もなく解体され、その部材や装飾の一部は海を渡った。それらは現在ハイリッヒ・フォン・シーボルトのコレクションとして收藏されているが、近年展覧会のため一時日本に里帰りした。

と書いていますが、桂昌院の霊牌所の建物も同じ頃に取り払われたとみられます。

今回はこの二つの霊廟の在りし日の姿を、発見された銅灯笼とともに描いてみようと思います。

1. 桂昌院霊廟

桂昌院は綱吉の生母。三代將軍家光の側室で、お玉の方と呼ばれました。『幕府祚胤伝』には次のように記されています。

桂昌院殿 於玉の方 常憲公、亀松君の御母堂

二条関白光平公家司本庄太郎兵衛宗利（初名宗正）の女、北小路宮内大輔道芳の妹。はじめ光子、次て秋野と称し、また於玉の方と改む。寛永年中、中の丸殿の御供をなして下向。のち本丸奥勤め。延宝八年庚申七月十八日、本丸に入らせらる。十一月十二日五の丸へ御入り（是よりかんだ御殿、或は白山御殿等に住棲せらる）御賄料金一万両、米一万俵（一に五千俵）貞享元年甲子十一月九日、従三位の宣下あり。元禄元年己巳十一月廿六日、三の丸へ御移棲（元禄四年賄金一万両を加え、同七年米一万千五百俵を加う）

同九年丙子正月十三日、七十の御賀あり。同十五年壬午二月九日、叙従一位（勅使醍醐中納言昭尹、院使東園宰相基長、宣命使石井少納言行康、固身土御門三位康藤）

宝永二年乙酉六月十八日、御不予に依り総出仕、廿二日二の丸に於て御逝去、御年七十九。廿三日酉刻御出棺、増上寺へ御葬送。今日廿四日、廿五日総出仕、普請七日、鳴物十七日停止。御導師堪誓門秀大僧正。（廿七日より御法事、万部を読む。総奉行秋元但馬守喬朝、八月十一日御結願、御名代稲葉丹後守正通、西の丸御名代本多伯耆守正永、霊廟助造松平遠江守忠喬。七月廿九日、仏心院を創め御別当となす。御別供料七百石、別に

惠照律院を開き常念仏所となし、五百石を附す。八月廿二日御参詣）
桂昌院仁普興国惠光大姉と申す。

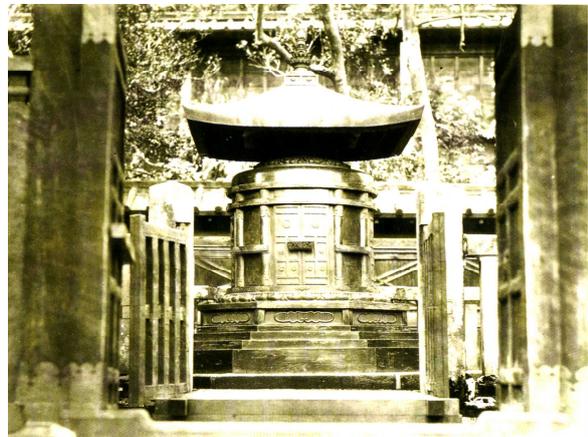


写真1 桂昌院宝塔写真

桂昌院の霊廟については何枚かの写真が残されています。『鹿鳴館秘蔵写真帖』（社団法人 霞会館 1997年）に納められている増上寺の写真資料にも桂昌院の霊廟風景があります。ただし今回この『鹿鳴館秘蔵写真帖』を調べていて、写真に付けられているキャプションに誤りが多いことが判りましたので、精査しながら使用していくことにします。

例えば文昭院鑄拔宝塔としているこの写真（写真1）ですがこれは桂昌院の宝塔です。文昭院の宝塔も鑄銅製の宝塔ですが、宝塔の塔身中央に大きな葵の紋が付けられています。

写真10に現在狭山山不動寺に移された桂昌院宝塔の写真を掲げておきます。

同じ『鹿鳴館秘蔵写真帖』の中に桂昌院の霊牌所としている写真が3枚ありますが、その内2枚（写真2、3）は確かに桂昌院霊牌所の正面と側面の写真です。『東京国立博物館蔵 幕末明治期写真資料目録I』に同じ写真が有りますので、ここではその写真を掲載しておきます。写真の撮られた位置を図2に示しておきます。

写真2は桂昌院仏殿を正面から見ただどころです。右手奥にある建物は、昭徳院（徳川家茂）の奥院唐門と思

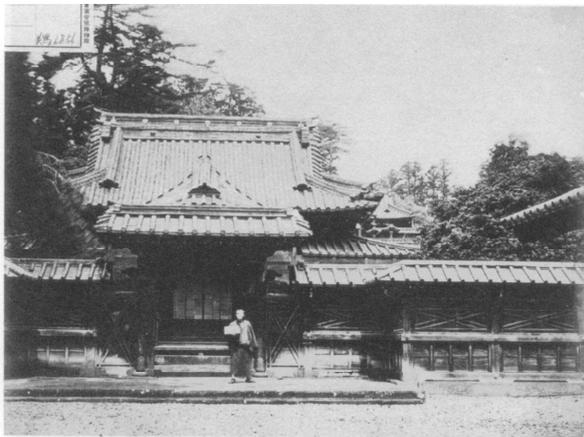


写真2 桂昌院霊牌所正面

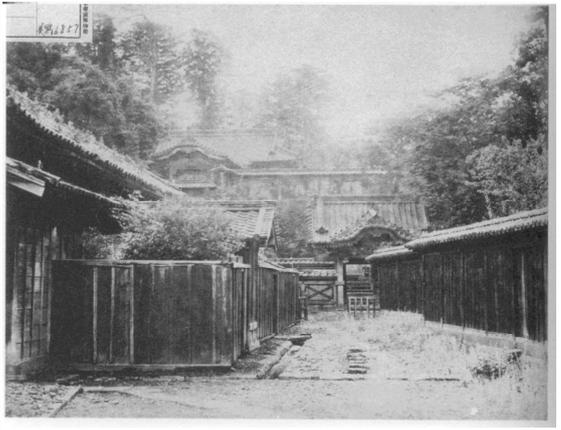


写真3 桂昌院霊牌所側面、崇源院墓所正面

われませす。写真3の奥手に映っているのが崇源院墓所の唐門、また左手奥に見える建物が慎徳院(徳川家慶)の奥院唐門です。
 とここで『御触書天保集成』に次の様な記述が有ります。
 文化十三年十一月
 寺社奉行え
 増上寺 桂昌院様御廟所 御拝殿、
 今度不及御普請、取拂被 仰付 候、
 此段増上寺并御別當え可被達候

この御触書からすると御拝殿が取り払われたことになっていますが、絵図には拝殿が描かれています。東京都中央図書館の木子文庫に収められている『増上寺桂昌院様御佛殿仕様書』には、御佛殿、御廊下、御拝殿と並んで御廟御拝殿の仕様が書かれていますのでここで言う「桂昌院様御廟所御拝殿」と言うのは奥院墓所に設けられていた拝殿のことと思われる。

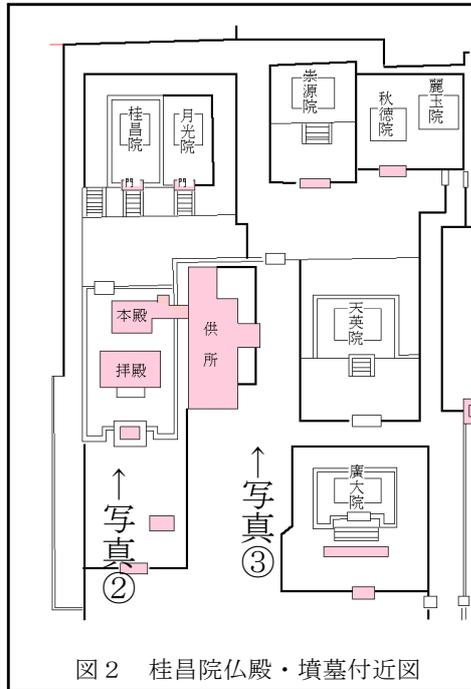


図2 桂昌院仏殿・墳墓付近図

桂昌院仏殿内部の様子を伺うことの出来る写真が現存します。桂昌院仏殿は明治初年に取り壊され、大倉喜八郎によって買い取られた仏像や仏殿内部の装飾品は、大倉集古館に納められました。この写真は、大倉集古館の絵はがきですが、残念ながら関東大震災により焼失してしまいました。
 大倉喜八郎が桂昌院仏殿の仏像や装飾品を買い取ったいきさつが『立志実伝大倉喜八郎』(尾立維孝 一松学舎出版部 1925年)に記載されています。



写真4 大倉集古館絵葉書 桂昌院仏殿

夫から御維新の後に、徳川家の御霊廟が二つ払い下げになりました。一つは上野の御霊廟ではは外国人が買取りましたが、その破壊の有様は誠に無残傷心の極みでございました。所が間もなく芝の御霊廟も、和蘭人のシーボルトと云う人に払下げになりましたが、之を私が聞いて甚だ驚きまして又候上野の様に跡方もなく取崩されて外国へ持ち行かれては残念であると考えまして、早速シーボルトに相談し譲受けたのが今存置して御座います桂昌院の霊廟であります。

大正七年大倉集古館刊行の『大倉集古館陳列品目録』には

上段の間
 舊桃山城竝桂昌院殿
 霊廟之用材を以て建之
 と有ります。



写真5 桂昌院奥院墓所



写真6 月光院墓所・宝塔

実はもう一枚桂昌院の墓所を写した写真があります。『幕末明治期写真資料目録I』ではただ、「増上寺」とだけ記されていますが、この写真5は後背の石垣、霊廟門の位置からして桂昌院墓所前と考えられます。宝塔の一部も映り込んでいます。ところでこの写真の門の左右に唐金灯籠が写っているのが判るでしょうか。左手は葺手しか見えません。この唐金灯籠については後に触れます。

絵図では桂昌院の墓所の隣に

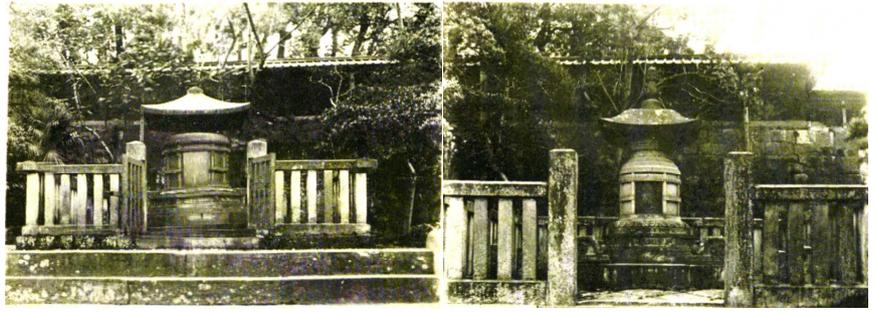


写真8 桂昌院宝塔

写真7 月光院宝塔

月光院の墓所が描かれています。月光院は家宣の側室で七代將軍家継の生母です。

『鹿鳴館秘蔵写真帖』には「月光院輝子墳墓門および宝塔（？）」としていますが、これは月光院の墓所と宝塔で間違い有りません。後方に覆い被さる様に見えるのは慎徳院の奥院唐門です。

桂昌院奥院墓所宝塔と、月光院奥院墓所宝塔の位置関係が良くわかる写真を掲げておきます（写真7、8）。
『徳川家霊廟』（田辺泰 彰國社 昭和十七年）の中に納められた写真で、戦災前の貴重な映像です。

元々崇源院の墓所が有った場所の前に、桂昌院仏殿と奥院墓所が造成され、月光院は桂昌院佛殿を相殿として奥院墓所のみが桂昌院の墓所の隣に営まれます。

少し時代が経って徳川家慶、家茂が亡くなった後に文昭院廟に合祀され、文昭院奥院右手の土手の部分に石垣が築かれ、慎徳院、昭徳院の奥院墓所が造営されます。後に昭徳院の脇に静寛院の墓所も造営されます。

桂昌院、月光院の宝塔の背後に見える仕切り塀は石垣の上に設けられた物です。

戦後行われた増上寺徳川家霊廟の解体調査時に写された写真（写真9）があります。『骨は語る徳川將軍・大名家の人びと』（鈴木尚 東京大学出版会 1985年）の記録写真で、草むした墓所に宝塔だけが隣り合わせに並び、石灯籠が何基か打ち捨てられた様に置かれています。

2. 桂昌院宝塔

桂昌院の宝塔は調査の終わる間もなく所沢へ運ばれ、現在の狭山山不動寺に安置されました。

ところで此の宝塔ですが、正面の棧唐戸と錠は失われてしまいました。ほぼ原型を留めており、文昭院の宝塔に見間違えられた程立派な鑄銅製の宝



写真9 増上寺調査時の桂昌院、月光院墓所



写真10 狭山不動尊桂昌院宝塔（背面）

塔です。

問題はこの棧唐戸に付けられている紋様の事です。『鹿鳴館秘蔵写真帖』には

桂昌院宝塔は鑄銅製の多宝塔である。

この形は徳川家墓の表飾としては数少ないもので、増上寺では3基だけである。桂昌院宝塔は文昭院よりは少し小形であるが整っていること、宝塔正面扉に「劍かたばみ」の定紋を表していることが特徴。

と書かれています。此の記述が『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体』（鈴木尚、矢島恭介、山辺知行 1967年）の次の記述を引き写したことは明らかです。

宝塔は、鑄銅製の多宝塔である。この形は徳川墓の表飾としては数の少ないもので、増上寺では文昭院の宝塔に用いられている外はこの桂昌院例があるだけである。この桂昌院多宝塔は、文昭院宝塔より形は少し小形であるが整っていること、また、宝塔正面扉に「劍かたばみ」の定紋を表しており、これは桂昌院の紋所をあらわしたもので徳川氏の墓地に別の家の家紋をつけたのも注目される。桂昌院が將軍の母であることから調整されたものである。

実は私も此の「劍かたばみ」の紋は桂昌院の実家、つまり本庄家の紋であるとばかり思っていました。

改めて本庄家の家紋を調べてみます。直近の宝永五年の「正風武鑑」（『江戸幕府大名武鑑編年集成』第五卷 東洋書林 1999年）には「繫ぎ九目結」



写真 11 輪宝



写真 12 正風武鑑(宝永5年)

と「違い大根」が記載されていますが、「剣かたばみ」は見えませんが、となれば、この紋様は何なのでしょう。その答えを得るために、桂昌院霊廟の造立についての記録を調べてみることにします。

まず『常憲院殿御実記』から関連の記事をひいてみます。

宝永二年六月

○廿二日よべ。 従一位桂昌院殿うせさせ給ふ。よて群臣執政に謁し。御気色うかがひ奉る。 尼公の御遺骸増上寺に納め進らするにより。秋元但馬守喬知。少老井上大和守正岑。作事奉行曲淵越前守重羽。小普請奉行間宮播磨守信明其事ども奉り。

○七月朔日作事奉行曲淵越前守重羽。小普請奉行間宮播磨守信明。并に小普請方二人に。 桂昌院殿霊牌所の造営を仰付けらる。

○(九月)十一日寺にて 桂昌院殿霊牌所柱立により。秋元但馬守喬知。井上大和守正岑。助役松平遠江守忠喬まかり。

○(十一月)三日三縁山 桂昌院殿霊牌所上棟あり。秋元但馬守喬知始め。事にあづかる輩まかりむかふ。大工棟梁鈴木修理長頼に銀三十枚たまふ。

○廿日桂昌院殿宝塔供養により。秋元但馬守喬知はじめ。事にあづかるともがら増上寺にまかる。

○廿二日桂昌院殿遷座により。秋元但馬守喬知代参す。

これらの記事から、桂昌院の霊廟の造営は宝永二年七月一日から始まり、十一月三日に上棟を迎えたことが判ります。大工棟梁の鈴木修理長頼が造営の事に当たりました。鈴木修理は大工棟梁として造営に関わる記事を日記に

残しており、『鈴木修理日記』(近世庶民生活史料 未刊日記集成第三、六卷)として公刊されています。長頼は桂昌院廟上棟後に亡くなりますが、幸いそれまでの記録が残されています。この中に面白い記事が残されています。関連部分だけを抜粋します。

十月廿八日 戊午 晴

一、巳刻、増上寺江出ル

一、今日は御宝塔磨、かりやす洗致ス、其外塗・彩色当掃除致、七ツ時帰。十一月七日

曲淵越前守殿方御手紙

一、桂昌院様御宝塔二付候葵之御紋、不残取候間、外模様二致置候様二、但馬守被仰候、其段、椎名二申付、紙形之模様書付差出候様申付候。尤御自分江も伺候様申達候。先日之御宝塔地割、椎名方へ御越可有之候、尤少ク致、我等方江地割一通り御越可有之候、以上。

十一月七日 曲淵越前守

鈴木修理様

十一月九日

一、桂昌院様御宝塔二付候葵之御紋落し、丸の内りんほう二可致由、今日寄合二而相究、則椎名呼寄申付、右之段、秋元但馬守殿江申上、可相極旨被仰渡。

鈴木修理の監督の元、霊廟の造営は順調に進み、鋳物師である椎名伊予が制作した鋳銅製の宝塔も無事増上寺内へ引き込みが終わり十月二十八日には最終の仕上げが行われています。ところが十一月七日になって作事奉行曲淵越前守から書状が届き、桂昌院様御宝塔に付けられている葵之御紋を全て取り払い、別の模様置き換える様に命じられています。

つまり、最初は桂昌院の宝塔には葵の紋が付けられていたことが判ります。ところが十一月九日になって葵の紋の代わりに「丸に輪宝」を付ける様に指示されます。しかも外の模様と取り替えることが指示されていますから、付け替えるのは紋では無く模様であること意識されていたことが判ります。つまり此の文脈から見ると桂昌院の宝塔に付けられているのは「剣かたばみ」の紋ではなく「丸に輪宝」の模様であったことになりす。

もう一つ此の『鈴木修理日記』には面白い記事が有ります。

十月廿六日 丙辰 晴、曇

曲淵越前守殿方御手紙。

御石灯籠之義、対馬守殿江相伺候へば、如此付紙被成被遣候間、高サ五六寸ほどひきく、惣体五六分程石たゞきちぢめ候様ニ御申付可有之候、尤恰(好)能、相違間違無之様被申付、大帳ニも右之旨御留置可有之候、以上。

十月廿六日

鈴木修理様

付紙

五六寸ひきく可仕候。

御石灯籠之義、清揚院様御石灯籠方五寸程ひきく可仕と奉存候間、御内意奉伺候、以上。

十月廿四日

曲淵越前守

ここでもほぼ出来上がっていた石灯籠を叩いて当時同時に造営が進行していた、清揚院の石灯籠より小振りな物に作り替えると命じられています。この辺りの事情は後程考察してみることになります。



写真 12 有章院靈廟棟札



写真 13 十一代將軍子女の宝塔

3. 輪宝

では宝塔に付けられた「丸に輪宝」の模様とは何なのでしょう？

輪宝というのが密教の仏具で有ることとは言うまでもありません。勿論、輪宝を家紋にした家も有りますし、お寺の紋として使われている例としては成田山新勝寺が有ります。しかし將軍家靈廟の宝塔に描かれた模様ですから、これは邪悪な物から身を守るといふ輪宝の仏具としての効用そのもので有ろうと思いません。

まず徳川家靈廟について写された写真の中に「輪宝」の模様が無いか調べてみます。

『東京府史蹟保存物調査報告書第十一冊』(昭和九年東京府)には「有章院靈廟棟札(宝暦十二年)」が載っています

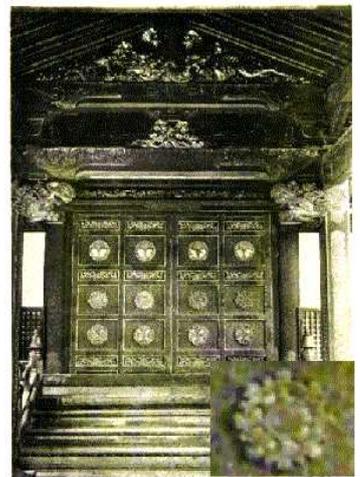


写真 14 慎徳院靈廟唐戸

すので、桂昌院の宝塔に輪宝の模様が付けられた理由を探ることに繋がります。

『東叡山寛永寺 徳川將軍家御裏方靈廟』(寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団編 2012年)は寛永寺に埋葬された徳川將軍家裏方墓の発掘調査の公式記録です。

この発掘調査を手がけた今野春樹氏の『徳川家の墓制』(平成二十五年)は、寛永寺裏方靈廟の発掘調査の成果を要領よく纏めてあるので、ここから宝塔に関する記述を引いてみます。

八角形の宝塔は崇源院(二代秀忠)、高巖院(四代家綱)、天英院(六代家宣)、心観院(十代家治)、広大院(十一代家斉、浄観院(十二代家慶))に見られる。全て石製であり、八角形宝塔が御台所特有の形状である。ちなみに靈牌堂で靈牌(位牌)を納める「宮殿」も八角形である。

現状では將軍生父母お墓標は15基確認されている。將軍生母としては伝通院(初代家康)と崇源院(三代家光)以外は全て側室である。

伝通院は小石川伝通院に埋葬されている。墓標は宝篋印塔であり、非常に大きい物である。崇源院も埋葬当初は宝篋印塔であったことから、徳川將軍家において古い時期の墓標には宝篋印塔が採用されていたと考えられる。

寛永寺には生母では宝樹院(四代家綱)、長昌院(六代家宣)、浄円院(八代吉宗)、至心院(十代家治)、香琳院(十二代家慶)、慈徳院(十一代家斉)、本寿院(十三代家定)、実成院(十四代家茂)、蓮光院(徳川家基)、生父では最樹院(十一代家斉)が埋葬されていた。墓標は宝樹院が八角形宝塔、明治期に没した本寿院、実成院が笠塔婆である以外は円形宝

が、棟札の上部には「輪宝」が付けられています。(写真12)

『鹿鳴館秘蔵写真帖』に「十一代將軍子女の宝塔」という写真があります。棧唐戸に輪宝が二点取り付けられているのが判ります。

『徳川家靈廟』の慎徳院靈廟の唐戸にも徳川の家紋と共に輪宝が描かれています。(写真14)しかしこれは何れも桂昌院以後の造営物で

塔であり、基本的に將軍生父母の墓標には円形宝塔が充てられている。宝樹院の八角宝塔は本来御台所専用の宝塔であるが、宝樹院（承応元・一六五二年没）は將軍生母としては崇源院（寛永三・一六二六年没）について古い没年であり、將軍家葬制が未だ確立していない時期であった可能性が高く、そのため円形宝塔ではなく、八角形宝塔が建てられたと考えられる。

崇源院、高巖院、天英院、心観院、広大院の笠下面には雲唐草文、浄観院には如意文が刻まれ、崇源院、高巖院、心観院、浄観院の塔身棧唐戸入り板には輪宝が刻まれる。

『東叡山寛永寺 徳川將軍家御裏方靈廟』から、この部分に該当する宝塔棧唐戸の写真と、今野氏の解説を下に書き抜いておきます。

四つの宝塔に輪宝がはつきりと見て取れます。但し、今野氏が挙げている崇源院の宝塔は現在も増上寺徳川家墓所に在りますが、棧唐戸の部分は失われていて、古い写真からも残念ながら輪宝の模様が付けられていたかどうかは判明しません。

ここに掲げた四つの宝塔写真の内心観院と浄観院は桂昌院からは後の造営に成りますが、高巖院、長昌院は桂昌院に先立っており、長昌院は寛文四年に亡くなり日暮里の善性寺に葬られましたが、宝永二年に寛永寺に改葬されます。幕府の作事奉行はこの時期に清揚院、長昌院、桂昌院の三つの靈廟の造営を同時に請け負っており、鈴木修理も大工棟梁として指揮監督を行っています。

今野氏は増上寺、寛永寺靈廟の將軍御台所、生父母の宝塔を通覧しながら、將軍御台所の宝塔は八角形、生父母の宝塔は円形であったことを示しています。後に書く清揚院の宝塔も円形です。

また、將軍御台所、生父母を通じて葵の紋が付けられたことが無く代わりに輪宝が描かれていた物が多いということを明らかにしています。

翻って、桂昌院の宝塔を見てみれば、円筒形であり、付け替えられた棧唐戸の模様は輪宝です。

『鈴木修理日記』を読んでいて、この清揚院、桂昌院の靈廟が作られる時期には盛んに前例を調べていることが判ります。書き物が無い場合には建物の構造を調べて書き出させています。桂昌院の銅製宝塔を作る際にも参考にしたのは、少し前に造替された厳有院（家綱）の銅製宝塔です。

前にも書きましたが「木子文庫」には常憲院廟の石灯籠図、唐金灯籠図が

何枚かずつ収蔵されています。徳川家靈廟の奉獻石灯籠の形を見比べてみれば寛永寺の厳有院廟とそれ以前のものには常憲院廟以後の物と明らかに違っています。桂昌院の宝塔から完成直前になって葵の御紋が取り去られ、輪宝の模様に置き換えられたのも、こうした時代の背景による物と考えられます。今回は同じ時期に造営が進められた清揚院靈廟を概観しながら、靈廟が作られていく風景を見ていくこととし、最後にミラノから報告された清揚院灯籠、ペンシルベニアから報告された桂昌院灯籠について紹介することにします。



写真 17 心観院宝塔
棧唐戸の上下には柱間をわたす長押が表現され、棧唐戸には上下に合計4点が精緻に彫られている。



写真 15 高巖院宝塔
塔身は花崗岩製であるにも関わらず、後棧唐戸は安山岩製であることから、後棧唐戸の全面には2つの輪宝が刻まれている。



写真 18 浄観院宝塔
棧唐戸の上下には柱間をわたす長押が表現され、棧唐戸には上下に合計4点が精緻に彫られている。



写真 16 長昌院宝塔
塔身は花崗岩製であるにも関わらず、後棧唐戸は安山岩製であることから、後棧唐戸の全面には2つの輪宝が刻まれている。